

雑誌『少年世界』における“われわれ意識”の形成に関する一考察 A Consideration on the Formation of our Consciousness in “Shonen Sekai”

早川 雅子
Masako HAYAKAWA

Keywords : Shonen Sekai, Modern boy concept, Our consciousness

キーワード : 少年世界, 近代的少年概念, “われわれ意識”

序

近代は、考え行動する主体＝われが成立する時代である。そして、われを表現する装置、文章を誰もが手にし、われを伝える手段、出版メディアが発達普及した。われは他者と同時に成立するから、われの成立は、われわれの成立でもある。われが表現し伝える世界は、前近代より遙かに広がり、且つわれわれの世界に連なるようになった。近代において、文章と出版メディアを手に入れることによって、われわれは思いや感情を伝え、共有することが可能になったのである。われわれに共有する思いや感情、すなわち、さまざまな差異を包摂する広範な層が共有する意識を、“われわれ意識”と呼びたい¹⁾。

もちろん、“われわれ意識”は前近代にも存在した。しかし、それは武家思想、町人思想など身分ごとに形成された意識、あるいは村や町など地域ごとに形成された意識など、分限的な意識だった。われわれ日本人の意識という捉え方は、国民国家の誕生を待って形成されていったといえよう。国民国家形成途上期、“われわれ意識”はどのように形成され、どのような内容だったのだろうか。

このような問題意識のもと、1890年代後半の少年を対象に設定し、彼ら少年における“われわれ意識”を考察したい。少年を対象に設定する理由は、二点。第一は、当該少年が幕末維新の変革期の後に生まれ、明治政府による近代教育を受けた世代だからである。近代に生まれ成長した世代を対象にすることで、近代における“われわれ意識”の萌芽を考察することができる。第二の理由は、雑誌『少年世界』の存在である。

『少年世界』は、雑誌王国といわれた博文館が1895（明治28）年に創刊、1934（昭和9）年まで続いた雑誌である²⁾。当時相次いで発行された子ども向け雑誌のなかで最大の発行部数を誇り³⁾、修学期にある多くの子どもが読んでいた「日本の二十世紀を開いた雑誌の最重要な一

つ」⁴⁾と評される。童話作家・巖谷小波を主筆に迎えて編集された雑誌は、論説、時事、歴史、小説、科学、文学、さらに読者投稿や学校案内など広い分野を掲載する総合雑誌的な内容で、巻頭巻末の宣伝広告も含めて、情報の重要なメディアであった⁵⁾。『少年世界』は、読者少年の思想形成を解明する資料的価値を有するといえる。

本稿の課題は、『少年世界』掲載記事の分析によって、雑誌が提供する“われわれ意識”の内容、および形成過程を明らかにすることである。いうまでもなく、“われわれ意識”の形成は、雑誌、雑誌と読者、読者間などの相互作用によって生まれる。先ずここでは、雑誌『少年世界』の働きに焦点を当て、読者少年が“われわれ意識”を形成、共有するように設けた装置を考察する。

『少年世界』は、名著普及会1990年刊行の復刻版を使用する。同誌発行番号は、1895年1月発行が第1巻第1号、1896年1月発行が第2巻第1号のように、年間発行冊子分をまとめて巻で区分、号数は巻ごとに振られた。また、1899年の第5巻までは、月二回発行である。これらを踏まえ、本稿の引用表記は、原本巻数-号数_原本発行年月_復刻版巻数-頁数、とする。例えば、1895年8月発行の第1巻第15号は、1-15_1895.8_3-p.1234、である。引用文は、仮名遣いは原文のまま、旧字体は新字体に改め、必要に応じて句読点を打った。なお、引用文中「」は原文、傍点は全て筆者による。

1. 近代における少年概念と本稿における少年

1. 1. 1890年代末における「少年」と「青年」

始めに検討したいのは、「少年」という概念である。それはまさに、本稿における“われわれ意識”の本体である。

周知のように、近代的な少年概念は前近代には存在しなかったし、『少年世界』創刊時においても未だ確立していなかった。むしろ、『少年世界』編集方針の変遷過程において、それまでの『少年世界』の読者を切り放していくように創刊された『幼年世界』『中学世界』『少女世界』の出現に歩調を揃えるように、近代的な少年概念が成立していったといわれる⁶⁾。そこで、『少年世界』の編集方針、読者の投稿を手がかりに、近代的な少年概念の成立過程を整理し、本稿における「少年」＝「われわれ」を提示したい⁷⁾。

本誌は幼年雑誌、日本之少年、学生筆戦場、及少年文学、幼年玉手箱合併改題したる者なり

このように銘打って、『少年世界』第1号は刊行された。銘にみる雑誌編纂方針、そして同時に創刊された『太陽』の兄弟雑誌という位置づけが、創刊当初における『少年世界』の読者層を表している。

合併前の5雑誌の読者層は、『幼年雑誌』『幼年玉手箱』は尋常小学校1、2年生が中心、一方、

『学生筆戦場』は『穎才新誌』の流れをくむ投稿雑誌で、投稿者の大半は10代後半であった。だから、これらを合併した『少年世界』の読者層は、尋常小学入学期から10代後半までの範囲を包括することになる。実際、第1巻第4号において、少年の亀鑑と成る者を褒賞する目的で「名誉章牌」が創設されるが、章牌贈与対象者の年齢を満6歳以上17歳以下の少年諸君に限ると規定している（名誉章牌は創刊初年の1895年1年間のみ開設、翌年には廃止された）。

さて、兄貴分にあたる『太陽』もまた、『日本商業雑誌』、『日本大家論集』、『文芸共進会』など6誌を合併改題、専門家による論説を中心に、政治、法律、諸産業など多分野における内外の新知識や新情報を提供する総合雑誌として登場した。その記事内容からみても、『太陽』の読者層は、専門的な知識や情報に適応しうる知的成人であろう。

博文館が既刊の雑誌群を合併総合し、新たに二つの雑誌に改編したのは、読者層を想定してのことであり、その年代を大きく二つに分けて括ったからだといえる。『太陽』の読者層は、知的成人、いわゆる大人である。とすれば、『少年世界』の読者層は、未だ大人の域に達していない年頃、その意味では子どもとなる。年齢としては、6、7歳から10代後半ないし20歳前後が相当する⁸⁾。この読者層こそが、『少年世界』の創刊当初、つまり1890年代後半における「少年」であった。

そもそも、近代以前の日本社会においては、青年期は存在せず、大人（成人）と少年は直接連続していた。少年は、男女の区別なく成人に達していない未熟な子ども全体を意味し、現在の幼年期から青年期までの広い年齢層を包括する言葉であった。この少年時代の後半期を表す言葉、すなわち「青年」の概念は幕末に萌芽し、明治初期から人口に膾炙するようになる。それは幕末期に生を受けた若者が都市に集まってきた時期である。

明治初期の青年とは、都市に集まる学生や書生の称だといわれる⁹⁾。前田愛「明治立身出世主義の系譜」は、この明治初期の青年を、自らの人生を自ら選び取った世代、能動的に人生を切り拓いた世代だという¹⁰⁾。彼らは、幕末維新の変革期に成長するなかで伝統的な価値観を体験的に否定し、あるいは立身出世を目指し、あるいは自覚的に自己形成に励み、自らを社会変革の担い手と位置づけた者たちであった。この青雲の志に燃える者たちを表現する言葉が、青年である。明治初期の青年を代表するのが、1853年生まれの植木枝盛、1863年生まれの徳富蘇峰であり、つとに知られるように、徳富蘇峰が1887（明治20）年に刊行した『新日本之青年』は、青年という言葉が世間に知られる契機になった。

「青年」の出現によって、10代後半から20歳前後の年齢層は、次第に従来の少年期から切り離されていくことになる。しかし、前述したように、『少年世界』創刊当時、6、7歳から10代後半ないし20歳前後は、一括りにして「少年」といわれた。つまり、10代後半から20歳前後の年齢層は、少年でもあり、青年でもあったことになる。少年と青年が未分化の状況を、『少年世界』に寄せられた投稿から確認したい。

1. 2. 読者投稿における「少年」と「青年」

『少年世界』の読者投稿は、タイトル「寄書（後、少年詞藻）」に集録、1巻15号からは三項目に分類された。少年文「千紫万紅」、幼年文「飛花落葉」、詩歌韻文「清風明月」である。ここでは、「千紫万紅」掲載の寄書、すなわち少年文を検討する。

以下に挙げる〈寄書〉4本は、表題や本文中に「少年」「青年」が使われた寄書の典型例である。

〈寄書1〉2-9_1896.5_6-p.019

表 題：謹で我郷土青年諸君に一言を呈す

投稿者：長野県松代町 佐藤武明

論 旨：徒に上京し、佚遊に耽る者が多い。小学校卒業の後は家にとどまり勉学、あるいは地元の中学校に通うべき。文に武に、或いは農工業に希望を立て、「神州男子の名誉、松代男子の本領發揮せよ」と檄。

〈寄書2〉2-18_1896.9_7-p.1828

表 題：埼玉県少年諸士努力せよ

投稿者：埼玉県北埼玉郡 海軍予備校生 飯田佐平

論 旨：維新より此の方、軍人の燦は西国男児が占め、学校においては西国男児が時を談ずるなかで、県下に軍人志願者が少なきを憂う。「刻苦勉励、身振して正々堂々、軍人出でて他日県名を挙げられん事を」と檄。

〈寄書3〉2-23_1896.12_8-p.2336

表 題：四国の青年諸君に呈す

投稿者：徳島県海部軍木頭村 佐阪操

論 旨：四国青年の投稿が少なきを憂う。「四国青年奮起せよ、(奮って投稿し) 全国少年輩の文隊を砲撃し、全国青年にその名を知らしめよ」と檄。

〈寄書4〉2-18_1896.9_7-p.1829

表 題：岩手県男子に告ぐ

投稿者：岩手県西磐井郡平泉村 三浦三行

論 旨：岩手県青年の投稿が少なきを憂う。「今日の青年は昔の(奥州蝦夷と蔑視された) 無知蒙昧の青年に非ざるなり。…寄書欄を占領して我県青年の博文を各地青年に知らしめんことを」と檄。

寄書4本中の2本は、投稿者の年齢が明らかに10代後半以降だとわかる。〈寄書1〉は小学校卒業生に向けて進路を説き、〈寄書2〉は海軍予備校生である投稿者が郷土の士に軍人志願を促しているからである。表題をみると、前者では「青年」が、後者では「少年」が使われている。いずれも10代後半の同郷の若者を指しているが、これら同郷の若者たちの間に、「青年」と「少年」との使い分けを要する程の相違はみあたらない。「千紫万紅」に寄せられた投稿の表題をみると、「少年」使用数がやや多いものの、「青年」も頻繁に使われており、両者の使い

分けと投稿内容との関連性は認めがたい。

一つの投書の中に「青年」「少年」が混在するものもある。〈寄書3〉は、その一例である。表題は「青年」であるが、本文では一文の中に、「少年」と「青年」とが併用される。無頓着ともいえる混用で、語義を吟味したとは思われない。

寄書投稿の検討から、主張を訴える相手、あるいは投稿者自身を表す言葉として「少年」「青年」孰れを選択するかは、厳密に使い分けるべきかの判断も含めて、投稿者それぞれによって異なることがわかる。1890年代頃までは、「少年」「青年」は、個別の概念として成立、普及しておらず、未分化の段階にあったといえよう。

一方、投稿者たちは、自分自身や同世代の者たちが一人前の大人になるべき前段階に在ることは自覚していた。それは、「神州男子」「松代男子」「西国男児」など、寄書に多用される「男子」「男児」という言葉から読み取ることができる。〈寄書4〉は、「岩手県男子に告ぐ」と題し、投稿を促す文書である。投稿者にとって寄書欄は戦場に等しい（同様の比喩は多出する）。

東都博文館に少年世界のあるを知らん。本誌寄書欄は秀文鍛錬の良師友にして文軍の兵営なり。宜敷刻苦励精、硯の海に墨艦を浮べ筆の砲を以て寄書欄を砲撃し、他県青年の分隊を挫き寄書欄を占領し、以て我県青年の博文を各地青年に知らしめんことを。

(2-18_1896.9_7-p.1829)

〈寄書4〉は、題には「男子」を付け、本文では「青年」を使う¹¹⁾。岩手県男子に向けて、刻苦励精して智力を磨き、岩手県青年の博文を他県青年に知らしめ、故郷の名を高めよと檄を飛ばしている。ここでの「男子」と「青年」とは、ほぼ同義といってよい。寄稿者が使う「男子」は、単なる男の子どもではない。刻苦勉励によって故郷発展、延いては国威高揚の担い手となるべき自覚を促すという意味を込めて「男子」を使っており、「男（おと-こ）」「丈夫」に近い。「男子」「男児」を語る投稿者は、たとえ「少年」と称していても、自意識のある10代後半以降の若者なのである。

ところで、「千紫万紅」掲載の少年文は、題目にこれといった規定はなく、随想、紀行、意見など題目自由である。これら少年文のなかに、東京以外の土地、つまり地方で暮らす読者が、自らの郷里からの寄書掲載が少ないことを悲憤し、同郷の士に投稿を促す投書がある。いわば、「同郷の士に向けた檄文」である。この種の檄文掲載は、第2巻寄書に顕著で、その数75本に上る。第1巻では僅か7本だったから、激増である。引用した寄書は、第2巻75本中の4本で、「同郷の士に向けた檄文」に分類される。檄文掲載には地方への販売拡大の目論みもあったかもしれない。檄に促されるように確かに投稿数は増加するが、次第に投稿自体が目的化し、質は著しく低下していく¹²⁾。そして、第3巻では掲載数27本に収斂、編集方針の変更によって第4巻から姿を消す。

ここでは、「同郷の士に向けた檄文」増加が意味すること、一点を指摘したい。すなわち、東京から離れた地方において、勉学に勤しむ10代後半から20代前後の若者が少なからず存在

していた事実である。寄書を読むと、彼らの大半は、高等小学校、あるいは中学校進学断念を余儀なくされ、郷里に留まり土地の風習のなかで暮らし、家族の生計を支えている。そして、窮乏に耐えながら取って苦学独学の道を選び、何らかの名を遂げることを目指すのである。これら地方の若者は、自分の意志で自分の生きる道を選び取ろうとしている意味で、まさに青年と呼ぶに相応しい。明治初期、都市に集まる学生や書生を指して青年といった。1890年代末になると、地方の苦学独学生もまた青年として顕在化しつつあったといえよう¹³⁾。

1. 3. 本稿における「少年」＝「われわれ」

“われわれ意識”の形成とは、自分の意志で人生を選択したいという夢を抱く者同士として、郷土や国の次代の担い手であることを自覚する者同士として、互いに生き方や考え方を主張し、また共鳴することを通して、われわれの世界を造りあげることである。“われわれ意識”の形成には、自我意識と社会意識の発達が前提となる。こうした意識の形成途上にあるのは、初等教育を修めた若者であろう。

本稿における考察の対象は、“われわれ意識”を形成しうる少年である。すなわち、少年と青年の概念が未分化の時代に少年と呼ばれ、年齢としては10代後半から20代前後までの若者である。その意味で、本稿における少年は、近代的な青年に相当する。

さて、考察対象たる少年を10代後半から20代前後までの若者と定義したことを受けて、資料の範囲を絞り込まねばならない。『少年世界』の編集方針は年ごとに変更修正されるが、特に第5巻（1899年）で全面的な改定が行われた。主筆・巖谷小波の理想を反映した「高邁なる趣味の涵養を本位とし、力めて情操の陶冶に専念する」¹⁴⁾ という方針の下、意見表明の場であった寄書を廃止、15歳以上の読者を対象に『中学世界』を創刊したのである。この編集方針によって、本稿における少年は、『少年世界』の読者層から切り離されることになった¹⁵⁾。そこで、本稿の資料は、全面改定前の第1巻～第4巻を中心とし、なかでも少年の意見が数多く掲載された第1巻と第2巻に重点を置きたい。同時に考察対象期間も、1890年代後半に設定される。したがって、1890年代後半の少年における“われわれ意識”を考察することになる。

次に、1890年代後半の少年の特徴として、3点を挙げておきたい。第一は、その目指すところが明治初頭の青年とは異なる点である。既に自由民権運動は衰退し、1889（明治22）年の大日本帝国憲法発布、1890（明治23）年の帝国議会開設を経て、明治政府による近代国家建設のルールが敷かれた時期である。少年の目指すところは、明治初期のような社会変革や民権拡張ではなく、定められた国家の枠組みのなかでの学問による実業界での成功である。

第二は、明治政府による教育制度が制定され、義務教育を受けた世代だという点である。1872（明治5）年からの教育制度法令（学制）、1879（明治12）年からの総合的教育基本法令（教育令）を経て、1886（明治19）年3月から4月にかけて、初代文部大臣森有礼によって、小学校令、中学校令など学校種別に諸学校令が制定された。その後、学校令は度々改定されるが、この学校令を以て近代学校制度は確立したといわれる。また、1890（明治23）年には、

教育勅語が発布され、いわゆる儒教的モラルが復活する。少年たちは、定められた教育制度とカリキュラムのもとで義務教育を受けたのである。確かに、彼らは自分の人生を構想し、目標達成を目指して学問に勤しむ。しかしそれは、明治初期の青年のごとき能動的な選択ではなく、与えられた教育を基盤とした、予め定められた範囲を超えない限りでの意志決定といえる。その受動性は否定できない。

第三は、日清戦争の勝利による昂揚した国内の雰囲気、またロシアや欧米列強などに対する危機意識を背景にして、少年の側からも国民意識が盛り上がっている点である。彼らの主張には共通して、次世代の担い手という自負を認めることができるが、その自負は国民意識の表出でもある。少年側から湧き上がる国民意識は、明治政府による皇民政策と相互作用して、天皇制を支える臣民意識へと展開することになる。

2. 『少年世界』が提示する“われわれ意識”

2. 1. 日本像 — 「東洋の一大強国」 —

『少年世界』は、創刊号本文冒頭に「明治廿八年を迎ふ」と題した論説を掲げた。そこでは、『少年世界』の国家観や読者像、つまりは編集者の意図が端的に語られる。

我邦開けてより二千五百五十五年…、日章旗の輝く処、日本刃の閃く処、一撃して巨艦を沈め、一挙して牙城を陥れるの大盛事を後にし、有名轟然東洋の一大強国として、世界列国に歓迎せらるの大希望を前にしつつこの新年を迎えるが如きは、真個に未曾有の大快事にあらずや。

我が少年諸君は、其一面に於て智徳の進歩、又一面に於ては、此名誉ある新強国の少国民として今や方に世界の新舞台に立たんとす。噫何らの幸福ぞ。然れども乞ふ、記憶せよ。名誉大なれば責任亦重し。絶大の名誉を擔ひつつ、此の新強国の民たるもの、豈亦一大覚悟無くして可ならんや。覚悟とは何ぞ。他なし、此の得たる光榮と幸福とを永久保持せんと謀るにあり。

(1-1_1895.1_1-p.3~4)

論説は、発刊の辞であり、また、1873（明治6）年公定した神武紀元、いわゆる皇紀2555年年頭の辞でもある。万世一系の天皇による治世が始まって2555年、日清戦争の華々しい戦果によって、東洋の一大強国として欧米列強に伍さんとする国勢、この快事のなか迎えた新年に当たり、今や新強国となった日本の少国民としての責任を少年読者に訴える。

題目「論説」は、第1巻12号を以て廃止されるまで本文巻頭を飾り、国内外の情勢に関する見解、少年読者への要望などを掲載した。これに代えて新設した題目「尚武・講演」が記事文に止まり扱いても小さいのに比して、雑誌の主張を表明する社説的な位置づけであった。難易度の高い内容、共感を煽るような文語文は、明らかに年長の読者に照準を合わせた論説文である。そこで、この「論説」を資料にして、『少年世界』が提示する“われわれ意識”を検討したい。

まず、「東洋の一大強国」に成り上がったと誇らしげに語る日本の評価、日本像である。1895年当時の日本は、明治初年から挫折を繰り返してきた不平等条約改正が漸くイギリスとの間で治外法権撤廃に成功したところ、1911年の関税自主権回復に向かう端に立ったばかりであった。前掲論説の「世界列国に歓迎せらるるの大希望」は、不平等条約改正を切望する率直な表現でもある。国勢も国際的地位も欧米列強に未だ及ばない、これが現実である。しかし、東洋の一大帝国・清を相手に収めた戦果は、後進国という劣等感を一気に払拭し、新強国という誇大な国家像醸成を助長することになったようである。第1巻第2号の論説「第二の維新」では、日本の国際的地位を論じている。

（連戦連勝の結果）国の名誉世界に輝き、東洋の一強国として未開の列にありし我が国、今や一躍して大第一等国となり、英露仏独に劣らず、埃伊蘭西等より遙かに上位を占むる。第一の維新は内に於いての維新、第二の維新は外に向かつての維新、…第二の維新は、乃ち一国を挙げて世界競争の列に入るなり。（1-2_1895.5_1-p.121）

論説「第二の維新」では、日本の国際的地位は一層上昇する。これまで未開国の列に並んでいたが、戦勝によって一躍第一等国に加わり、その国勢は中堅ヨーロッパ諸国を遙かに優り、英露仏独のヨーロッパ列強に伍する位置になったと自負する。今や日本は世界列強と国勢を競う情勢にあり、国内における政治的社会的変革を第一の維新とすれば、この世界を相手にする新たな局面は「第二の維新」だと述べる。

「第二の維新」は、『少年世界』において記事のみならず、読者投稿でも好んで使われる表現で、両者に共通する日本像だったといえる。論説と読者の少年たちがいう「第二の維新」、換言すれば、彼らが描いていた国際社会を視野に入れたところでの日本像は、およそ次のように要約できよう。すなわち、「日本は東洋の一大強国の位置にあり、欧米列強と比肩できる可能性をもっている。今や日本は、世界と競合するため国勢増強に邁進している直中にある」、と。

この誇大な日本像を支える根拠の一つとして、論説は世界における日本の評価を挙げている。創刊号論説「有名轟然東洋の一大強国として、世界列国に歓迎せらるる」、第2号論説「国の名誉世界に輝き」「一国を挙げて世界競争の列に入る」などの表現を用いて、世界における日本の評価が説かれる。日本の勇名は世界に轟き渡り、世界は勇戦奮闘を褒め称え、列強に伍する競争相手と認めている、というのである。

論説の主張は、論証も客観性もない一方的な見解に過ぎない。しかし、最大の発行部数を誇る少年のオピニオンリーダー『少年世界』の論説である。そして、少年読者にとって『少年世界』は、未だ知らぬ海外への扉を開く数少ない貴重な情報源である。読者においては、信憑性は高い。世界なかでも欧米列強が日本を認めていると信ずるのは、想像に難くない。なによりも重要なのは、欧米列強が下した日本評価という点である。近代国家建設途上期においては、欧米近代先進国による評価というだけで、十分な自信と根拠となりうるのである。

対照的なのは、アジアやアフリカへの眼差しである。徹底して見下した態度をとるのであ

る¹⁶⁾。その態度は、文明水準、生活様式、精神性などさまざまな評価に現れるが、ここではアジア諸国の国際的地位を取り上げる。

次に挙げる論説「亜細亜の半面を担当する国」では、東アジアの独立国として清・朝鮮・タイ・日本の4国を列挙し、比較を交えながら評価を下している。

4国のうち朝鮮とタイは列強の干渉を受けているから真実の独立国とはいえず、「純然たる独立国は、わが帝国と清国とのみ」である。しかし、「清国は徒に龐大なるのみで、其の実力なきことは今度の戦争で分明」になった。したがって、「真正の独立国は我が帝国あるのみ」である。

日本は、「清国を助けて文明の領域に導き、朝鮮、シヤムを扶けて東洋の平和を維持するの任あり。亜細亜の半面を担当するものは、実に我が大日本帝国なり」

1-11_1895.6_2-p.1044

論説は、日本の優位性と任務を主張する。4つの独立国のうち朝鮮とタイは列強の干渉を受けている点、清国は対日戦争敗戦国という点で、真正の独立国と言いがたい。唯一日本だけは、列強の干渉を斥けた点、且つ戦勝国という点において、本物の独立国だという主張である。その上で、アジアの東半分において唯一真正の独立国たる日本の任務として、文明的劣位の国を文明国に導き、列強の干渉に苦しむ国力的劣位の国を支えることを課している。

この論説において、日本が真正の独立国である根拠は、列強の干渉を斥けた点、戦勝国という点の2点である。この根拠は、日本の側から3国をながめ、3国より優れた点を挙げたに過ぎない。国際情勢を全く無視し、著しく客観性に欠ける。要するに、日本の優位性を保証する観点を設定し、優位な立場から劣位の国を見下しているのである。東アジアの一大強国の任務もまた、優位な立場から相手を見下す論法によって導き出される。

論ずるまでもなく、東アジアの指導者という地位もまた、日本像を支える根拠の一つである。欧米先進国への憧憬と東アジア諸国に対する高慢とは、表裏一体の相関関係にある。憧憬と高慢は相乗して、誇大な日本像を支える根拠として機能する。

2. 2. 新強国の小国民

『少年世界』は、少年読者に向けて彼らに期待するさまざまな働きを提唱し、積極的な実践を呼びかける。こうした呼びかけを少年読者は、理想とする少年像、なすべき少年の生き方として受けとめる。『少年世界』は、どのような少年像を提示したのだろうか。

わが少年諸君は、其一面に於て智徳の進歩、又一面に於ては、此名誉ある新強国の少国民として今や方に世界の新舞台に立たんとす。

前掲した創刊号「発刊の辞」における少年への呼び掛けである。要点は、「智徳の進歩」と「新強国の少国民」の二点。後者「新強国の少国民」は帝国における少年の位置であり、前者

「智徳の進歩」は少国民の位置に在る少年に課せられた任務といえる。

まず、「新強国の少国民」である。少年を小国民、つまり帝国の次世代の担い手と位置づける表現は、毎回必ず一度といってよいほど頻頻と登場する。例えば、前掲「第二の維新」には、「第二の日本帝国国民たるべき我が少年諸君」がある。注目すべきは、少年の位置づけが彼らの自尊心を擽るレトリックを駆使して語られることである。

世界の第一等国たる此の日本を負担し、英米独仏露の諸国と競争し、文武の両道に於いて彼らを下風に立たしむるは、抑も何人の責任ぞや。嗚呼、是れ我が少年諸君ならずや。

(1-2_1895.5_1-p.122)

我が大日本帝国の運命は、一に繋りて未来の大国民たる我が少年諸君の肩上にあり。諸君は其の双肩に亜細亜の半面を担当せざるべからず。…此の大日本帝国を掲げて東洋の覇権を執り、亜細亜の半面を担当して宇内の平和を維持し天地の化育を賛襄する…是れ天賦なり。

(1-11_1895.6_2-p.1044)

レトリックの特徴は、壮大な形容にある。このレトリックによって、少年は単なる少年ではなくてしまう。‘世界の第一等国たる大日本帝国を双肩に担う’少年であり、‘欧米列強と競争し、東洋の覇権を執り、宇内の平和を維持し天地の化育を賛襄する’天賦の任を委ねられた少年である。少年を鼓舞するに十分な論調である。自意識の高い少年ほど、これら論説を読むに連れて、帝国における自身の位置を刻み付け、奮って任務遂行に励むに違ひなろう。少年たちにとって『少年世界』という雑誌は、その位置と任務の自覚を促し、自己を激励するためのエネルギー源でもあったと考えられる。

次は、「智徳の進歩」、まさに今少年が励むべき任務である。ここでは智と徳、つまり、知識と道徳との二つの面から課題が課せられる。知識の内容は、「発刊の辞」に述べられている。そこでは、日清戦争勝利は武術によって得たが、向後世界を相手に戦うには武術だけでは不足だとし、「新強国の小国民として世界の舞台に立たんとする名誉を保持」するための四分野を挙げる。

今日以後の名誉は、豈畜馬上のみを以て保持すべけんや。文学にも依らざる可からず、美術にも依らざる可からず、算盤にも依らざる可からず、鋤鋤にも依らざる可からず。

(1-1_1895/1_1-p.4)

新強国の少国民、換言すれば1890年代後半の少年が、帝国の担い手となるために修得すべき知識や技術は、文学・美術・算術・鋤鋤の四分野である。文学は自己表現の技法、美術は感性の涵養、算盤は算術、鋤鋤は農業技術、要するに、自己表現の基礎になる教養と実業に必要な知識・技能である。近代国家の基盤を固めつつあった時代、少年読者に期待したのは、近代国家発展の先導者という役割であったといえよう。

道徳の内容は、「名誉章牌贈与規則 第二条」が簡潔である。第二条では、章牌贈与条件を列

挙する¹⁷⁾。

第一項 学術優等、品行方正、学童の模範と成れる者

第二項 父母に孝、朋友に信、よく少年の亀鑑と成れる者

第三項 商家工場の徒弟にして、忠勤勉励著しき者

(1-4_1895.2_1-p.322~p.323)

章牌贈与条件第一項と第二・第三項とでは、対象者が異なる。第一項の対象は主に就学者である。もちろん知識と道徳は両立されねばならず、第一項では学術優等と品行方正を以て贈与の条件とする。ここでの品行方正は学校や家庭内における行状、例えば温厚篤実、父母教師に従順などを指すことが多い。

第二項、第三項の対象は働く少年で、家庭や在郷、奉公先での徳行が贈与の条件である。第二項の徳行とは、貧困のため学業継続を断念し、野良仕事に出て家計を助け、父母に孝養を尽くす、あるいは教養や品行に信頼を寄せる郷党のリーダー役を務めるなどである。第三項は、学業を断念して奉公に出た少年の徒弟としての忠実な働きである。前章で論じたように、『少年世界』の読者には多くの地方在住者がいた。第二項、第三項は、地方に留まり苦学独学する働く少年に向けた激励とも、また郷党のリーダーとして国家発展の原動力となる期待とも思われる。

こうして『少年世界』は、少年読者に智徳の進歩という任務を課すが、その任務遂行の糧として押したのは、精神力である。耐忍、克己、精苦、勤勉、黽勉、奮発等々、論説には精神力を表す語彙がずらりと並ぶ。苦学や貧困もまた、精神力を鍛え、成功の源泉とされる。

貧困を嘆く投書に対して、「少年子弟の貧賤は、余必ずしも傷まざるなり」と応えた批評は印象的である¹⁸⁾。かく応えた理由は、「艱難に得、安逸に失。…貧賤悲しむに足りず。自立する所以のもの」(2-15_1896.8_7-p.1530)だからである。目標達成のための苦学や忍耐、自己規制は、さかんに奨励される。少年は自らに厳しい道徳規律を課すことを求められるのである。

以上、『少年世界』が少年読者に提示した“われわれ意識”を二つの観点から考察した。第一の観点は、東アジアの新強国という日本像である。この誇大ともいべき日本像は、欧米先進国への憧憬と東アジア諸国に対する高慢というアンビバレントな意識を根拠にして成立する。第二の観点は、理想とする少年像である。少年は、新強国の小国民と位置づけられる。欧米列強に伍して競い、アジア諸国を導く日本の次代担い手として、学問と道徳との両面における刻苦勉励が奨励される。

3. 『少年世界』における“われわれ意識”形成装置

3. 1. 「我が」「我が少年諸君」

『少年世界』は、少年読者の側から“われわれ意識”形成に動くよう仕向けるために、様々な仕掛けを施している。このような少年読者を“われわれ意識”形成に向かわせる装置を、論説を資料にして検討する。特徴的な装置は、三点である。

第一は、「我が」「我が少年諸君」という表現である。この表現は、前掲引用の論説に頻出する。例えば、「第二の日本帝国国民たるべき我が少年諸君」、「我が大日本帝国の運命は、一に繋りて未来の大国民たる我が少年諸君の肩上にあり」などである。

「我が」は、自分が所有していたり、関係していたりする物事を自分の立場から指示する時に用いる連体詞である¹⁹⁾。そして、その物事が自分にも相手にも関係する共通のものを指す場合には、「われわれの」という意味が加わる。「我が」は、「われの」であり、「われわれの」でもある。

「我が帝国」、と論じたでしょう。我が帝国は、論じた者にとってわれの帝国であり、また、論者と少年が共に居住するわれわれの帝国である。そして、これを受けた側の少年読者にとっては、少年読者一人一人のわれの帝国であり、論者と少年読者たちがともに共住するわれわれの帝国になる。したがって、論説の「我が大日本帝国の運命」という投げ掛けを、少年読者は、帝国の一員である自分の運命として、そして、論者と少年読者たちわれわれが共有する帝国の運命として受け止めることになる²⁰⁾。少年読者にとって、自分の運命はわれわれ少年誰にでも共通する運命と捉えられるのである。

「我が」は、少年読者に自己意識の形成を促し、且つ論者と少年読者全体を包摂する“われわれ意識”を形成する。さらに、少年読者に対しては、自分と意識を同じくする少年たちの存在を保証し、“われわれ意識”や共同体形成の働き掛けを促す役割も果たす。

「我が少年諸君」では、「我が」に加えて、「少年諸君」も重要な働きをする。「少年諸君」という表現は、少年たちに一体感をもたらし、少年共同体の存在を想像させる効果をもつからである。論者が少年読者に向かって「我が少年諸君」と呼びかけると、少年読者は学識豊かな大人が、自分たち少年をあたかも同志のような意義ある集団として認めてくれたと解釈するだろう。「我が少年諸君」は、少年読者が自分自身を大人と共に帝国を担う価値ある少年集団の一員だと位置付けるよう機能する。「我が少年諸君」によって、我が帝国の構成員という“われわれ意識”が形成されるのである。

3. 2. 「責任」

第二の装置は、「責任」である。「責任」もまた、創刊号論説「発刊の辞」での初出を皮切りに、頻出する言葉である。以下は、「発刊の辞」の用例である。

我が少年諸君は、其一面に於て智徳の進歩、又一面に於ては、此名誉ある新強国の少国民として今や方に世界の新舞台に立たんとす。噫何らの幸福ぞ。然れども乞ふ、記憶せよ。名誉大なれば責任亦重し。(1-1_1895/1_1-p. 4)

ここでは、少年が新強国の小市民として世界の舞台に立たんとする事を、幸福、名誉と賛美し、それに応じた重い責任がある、と述べている。しかし、実のところ、少年が自らの意志で世界の舞台に立つと決断したのでもなければ、それに幸福や名誉を感じたのでもない。少年の位置、行為、幸福、名誉、責任すべてが、『少年世界』からの一方的な作為、いわば押し付けである。だから、ここでいう責任は、自由と相関する責任、つまり、自由な行為や行為の結果に対して、行為者に帰せられる務めを意味しない。『少年世界』における「責任」は、少年読者とその立場や意志とは関わりなしに課せられた務めである。そのせいだろうか、‘責’本来の意味「せざるをえないようにせきたてる」というニュアンスを拭いきれない。

「責任」は、世界の舞台に立つ立場に応じた責任という点からみれば、むしろ義務に近い観念だともいえる。実際、論説「少年の責任」では、義務とほぼ同義に解釈している。

論説「少年の責任」によれば、少年には四つの立場「日本国民、日本の後継者、人の子弟、学校の生徒」があり、立場に応じた四つの責任「日本国民としての責任、日本の後継者としての責任、父母の子弟としての責任、学校の生徒としての責任」がある。その責任とは、「其日常現実の職分を務めて倦まざるを以て責任と思へ」、それぞれの立場における本分に尽力することと解される²¹⁾。論説「少年の責任」における責任は、立場や職分に応じてしなければならない務めの意であり、義務と変わるところはない。

ところが、くだんの装置「我が少年諸君」を使い、「我が少年諸君の責任」という文脈で語ると、「責任」は自律性を帯びようになる。「我が少年諸君」は、少年読者が自らをして帝国を担う価値ある少年と位置付ける機能をもつ。したがって、「我が少年諸君の責任」の呼び掛けに応じた時点で、責任は与えられた務めから、少年自身が自らの立場に応じて定めた責務へと転化することになる。さらに、「我が少年諸君」は、我が帝国の構成員という“われわれ意識”も形成する。こうして、「我が少年諸君の責任」は、われわれ少年が果たすべき責務、すなわち少年たちが共有する社会的責任と捉えられるようになる。

もっとも、自らに責任を課したからといって、それだけでは帝国を担う価値ある存在になることはできないだろう。責任を果たしているという行為が必要である。実践を通してこそ、帝国における自身の役割や位置を体認していくことができる。「我が少年諸君の責任」は、また、少年読者に責任の実践を迫るのである。こうして、少年読者たちは、帝国次世代の担い手＝小国民ならば誰でも全うせねばならない任務「責任」を負い、「責任」遂行に邁進することになる。

第一の装置「我が（我が少年諸君）」、そして第二の装置「責任」は、少年たちに発奮を迫る要素にも、競争心を煽る要素にもなる。前章で紹介したように、寄書「千紫万紅」には、夥しい数の「郷里読者に投稿を促す檄文」が寄せられたが、これら二つの装置がもたらした効果だ

と考えると納得が行く。

寄書は、少年読者に課せられた、また、少年読者が自身に課した責任、すなわち刻苦勉励の成果を披露する場である。しかも、刻苦勉励は、少年読者一人のみならず、少年読者ならば誰でも果たすべき責任と受けとめられる。地方の少年読者が、自分が暮らす範囲をわれわれの世界と区切り、同郷の少年読者たちをわれわれ少年と捉えたとしよう。同郷からの寄書が少ない我が悔しさは、同郷の少年読者ならば誰でも感じるわれわれの悔しさであり、寄書掲載の榮譽はわれわれ同郷の少年読者皆の榮譽だと解釈されるだろう。寄書は、少年の競争心を掻きたて、同郷の少年読者たちとの間に“われわれ意識”を喚起したと思われる。同郷少年読者たちへの檄は、当然のことだったともいえる。

3. 3. 日本精神

第三の装置は、精神的優位性の誇示である。前述したように、アジアにおける日本の優位性は、アジア諸国に対する高慢と偏見から導き出だされている。その優位性の一つが、日本精神である。

『少年世界』では、主に清国人や朝鮮人との対比を通して、日本人の精神的優位性、特に、日本精神の崇高さが論じられる。この種の話題と手法は、日清戦争の戦闘報告『征清画談』や小説など、語り物の形式で繰り返し登場する。また、論説欄では、文字通り論文形式で、高らかに日本精神が賞賛される。

論説「日本人と清人」では、清国が国土、人口、体格、兵器まで全てにおいて日本に優れるにも拘わらず破れた理由は、「精神意気なければなり」という。

日本人は利を重んぜずして名を重んず、一身を軽しとして君国を重しとす、故に君国のためには、死を視ること帰するが如く、名誉のためには、生を捨つること土芥の如し、故に敵に会えば敢死奮戦し、或いは大胆冒険、殆ど為すべからざることを成すなり、この精神意気は、清人になくして日本人の特有なり。

清人は此の精神意気なし、故に精良の兵器あるも之を用ふること能はず、將討たれ、陣墜るも、苟くも遁逃生を全うするを計り、国敗れ君辱めらるる、恬として恥じ憤ふる心なし、是れ彼れと我れとの勝敗の由て岐るゝ所なり。

(1-6_1895.3_1-p.521~p.522)

精神的優位性を導き出す論法は、アジアにおける地位的優位性と同じである。精神意気という観点を設け、無条件に意義をもたせる。その上で、精神意気の有無を基準にして、優位と劣位を定めるのである。論文形式を執ってはいても、実証を踏まえた論ではない。

論説が説く精神意気とは、個よりも君国に価値を置き、君国と名誉のためには死を厭わぬ自己犠牲の精神を指す。その心意気を以て為れば成すこと能わざるなき程、崇高な精神である。この所謂伝統的精神主義がかかえる諸問題は扱措こう。重要なのは、自己犠牲の精神の意義

を、日本人特有の崇高な精神と意義づける点である。この意義づけによって、自己犠牲の精神は、日本人のみが備えるわれわれ共通の優れた精神と位置づけられるのである。日本人特有の崇高な精神という意義は、少年読者の自尊心を擲り、高揚感をもたらす効果をもつ。

結論

雑誌『少年世界』が、1890年代末の10代後半から20代前後の若者たちに向けて提示した“われわれ意識”は、およそ三点に総括できる。第一は、世界を相手に競争しうる段階に発展した世界が認める東洋の一大強国だという国家意識である。第二は、世界を相手に競争する段階＝第二の維新の担い手・小国民という位置と役割、第三は、担い手になるべく刻苦勉励して修養を積む責任である。三点は相関して、国民国家形成の原理となり、かつ近代天皇制を支える臣民意識に収斂する。これら“われわれ意識”は、少年読者をして恰も自らが形成した意識かのように思わしめる装置を駆使して展開された。「我が」「我が少年諸君」「責任」「日本精神」などの言葉を浴びせられ、少年読者たちはそれと知らずに“われわれ意識”を形成していったといえよう。

今回は、雑誌『少年世界』の提示を受けた少年読者が、どのように呼応するか、どのような“われわれ意識”を形成するかにまで考察が及ばなかった。次回の課題としたい。

最後に、看過できない問題を指摘しておきたい。われわれの世界を形成する少年たちの内部において差異が生じているという問題である。この内部の差異は、『少年世界』の記事の内に、また『少年世界』読者の内に現れる。

『少年世界』は、第1巻の「学校案内」では東京を始め都市に位置する大学・専門学校・高等学校・軍人養成学校を、第2巻の「学海彙報」ではこれら高等教育機関の諸行事を紹介する。また、入学案内や入試問題もしばしば掲載される。この点からいえば、『少年世界』は、高等教育入門書という性格を併せ持つ。一方の読者は、この種の情報を求める高等教育機関入学を目標にする少年、あるいは高等教育機関在学者である。その一方で、檄文投稿者のように、進学の夢絶たれて郷里に留まり苦学独学する読者も存在する²²⁾。都市に出て高等教育機関で学び自分の人生を選び取る可能性をもつ少年と、郷里に留まり苦学独学して成功の夢を抱く少年と、われわれ少年の内部には異なる二人の少年が存在するのである。

本稿では、内部における差異を視野入れつつ、少年全体における“われわれ意識”を考察した。しかし、少年たちは、読書行為を通して、われわれ内部における差異を否応なしに認識し、自らを差異の体系の内に位置づけていくことになる。少年読者による“われわれ意識”形成に関する考察では、少年内部における差異にも着目する必要がある。

【注】

- 1) 近代における“われわれ意識”の成立と変遷に関しては、成田龍一『近代都市空間の文化経験』（岩波書店、2003）を参考にした。同書所収「『少年世界』と読書する少年たち—1900年前後、都市空間のなかの読書共同体」は、『少年世界』における“われわれ意識”が詳述される。
- 2) 明治期の児童文学研究の嚆矢は、木村小舟『少年文学史 明治編 上下・別巻』（童話春秋社、1942）であろう。『少年世界』の編集に従事し、児童文学者でもあった木村は、『少年世界』を軸に、明治期の児童文学誌の出版状況を詳細に論じている。
『少年世界』に関する研究としては、1990～91年に刊行された『名著サプリメント 特集・少年世界』が特筆される。『少年世界』は、名著出版会によって1990年から合本復刻されるが、復刻事業に合わせて、同社発行『名著サプリメント』で特集が編まれた。
2000年代では、国立国際子ども図書館が主体となった『明治・大正期児童雑誌研究プロジェクト』がある。データベースを作成、活用した『少年世界』の研究で、小林聡子「明治・大正期児童雑誌研究プロジェクト活動報告（2008～2009年度）」（『国際児童文学館紀要』23号、2010）に活動の概要がまとめられている。
東京博文館の創業、『少年世界』発行の契機については、田中卓也a「近代少年雑誌における読者に関する一考察—明治期～昭和初期における『少年世界』読者の特徴を中心に」（『順正短期大学研究紀要』38号、2009）がコンパクトである。
- 3) 1895年の年間発行部数は190万部で定期刊行雑誌第2位、1896年は150万部、1896年は200万部で定期刊行物3位を占めていた（酒井昌代「新聞紙上看る『少年世界』」（『国際児童文学館紀要』第23号、2010）。
『少年世界』の販売方式は前金払いの予約制で、第1巻（1895年）から第5巻（1899年）までは1日と15日の毎月2回発行、第6巻以降は毎月1回発行である。したがって、年間発行数は、第5巻までは第1号から24号までの24部、第6巻以降は年12部、また、定期的他に増刊もあった。
- 4) 「『少年』と『世界』…監修者会議から」における小田切進氏の発言（『名著サプリメント 春期増刊号 特集=少年世界』名著普及会、1990）、p.2。監修者会議とは、『少年世界』復刻本監修者による会議で、出席者は小田切進（近代文学）、大久保利謙（近代史）、唐沢富太郎（教育史）、滑川道夫（児童文学）の4氏である。
- 5) 前掲3、p.2。
- 6) 田嶋一a「『少年世界』と明治中期の少年たち」（前掲2所収）、同b『〈少年〉と〈青年〉の近代日本—人間形成と教育の社会史—』東京大学出版会、2016、久本幸男「日本における「少年」「青年」の誕生」（『名著サプリメント 1990年12月号』名著普及会、1990）、北村三子「『少年世界』の創刊と子どものゆくえ」（『名著サプリメント 1991年3・4合併号 特集・少年世界』名著出版会、1991）などを参照。
- 7) 『少年世界』をはじめとした近代少年雑誌の読者に関しては、田中卓也氏の一連の研究がある。前掲2の田中a、同b「近代少年雑誌における読者に関する一考察—明治期～昭和初期における『少年世界』読者の特徴を中心に」（『順正短期大学研究紀要』36～38号、2007～2009）、同c「近代少年雑誌における少年読者の共同体形成に関する一考察—『少年世界』・『少年界』読者の比較を通して」（関西教育学会編『関西教育学会年報』35号、2011）。読者投稿の分析により読者像解明を目的とする研究だが、投稿の列挙にとどまるとの感は拭えない。
- 8) 『少年世界』投稿欄には、経歴や職業から明らかに20歳代前半とわかる投稿者もいる。また、田嶋一氏は、青年団活動指導者・山本滝之助が、23歳の時に『少年世界』を講読したことを指摘している（前掲、田嶋6b）
- 9) 前掲、田嶋6b、p.125～p.127。
- 10) 前田愛「明治立身出世主義の系譜—『西国立志編』から『帰省』まで—」（『近代読者の成立』岩波現代文庫、2001）所収
- 11) 本文中には、「東都博文館に少年世界のあるを知らん」と少年という語も現れ、青年と少年が混在

- するようにもみえる。投稿者が少年と青年を使い分けていたか、あるいは混在することに拘泥しなかったのかは、投書から読み取ることは難しい。
- 12) 第3巻になると「入欄の辞」と題して寄書掲載のみを目的とする投稿が頻出する。第3巻20号では、「入欄の辞」6本を列記し、評「入欄の辞を寄せらるるは可なり。然れども寧ろ始より一大文章を草して、本欄に光彩を放つに若んや。…殊に、入欄の辞なるもの、孰れも其趣旨を同ふするのみならず…」(3-20_1897.9_p.1249)という評が載る。それ以降、「入欄の辞」の掲載はない。
 - 13) 「我が故郷」「我が村の記」「我地方の蠶業」などのタイトルで、自らが暮らす郷里を紹介する寄書もある。この種の寄書は、第1巻で18点、第2巻で10点ほどを数える。
 - 14) 前掲書2、木村小舟『少年文学史 明治編 下巻』p.55~p.56。
 - 15) 博文館は、『少年世界』読者層を限定するため、次々に雑誌を創刊した。1899年創刊『中学世界』で15歳以上を切り離れたのを皮切りに、1900年創刊『幼年世界』で尋常小学校低学年を切り離し、1906年創刊『少女世界』で少女を切り離した。同時期には、地方の独学生向けに諸種の実業本が刊行された。その結果、『少年世界』の読者は、尋常小学校5、6年から高等小学校1、2年の中学進学を目指す男子に絞り込まれ、受験雑誌的位置づけになっていった。
 - 16) 成田龍一氏は、前掲書1のなかで、「科学」欄でもアフリカを非文明の暗黒と見下しつつ観察する態度を認め、また、中国人、朝鮮人と日本人を対置することによって日本の文明的優位性を保証する論理を指摘している。
 - 17) 第二条の贈与条件は、5項目である。譲与条件は、第4項は懸賞課題一等賞、第5項は運動会で優等者である。名誉章牌は、智、徳、躰の三育を奨励する目的で贈与される。
 - 18) 寄書「貧の桎梏」に対する記者評、2-21_1896.11_8-p.2225。
 - 19) 『日本国語大事典』(小学館)、『広辞苑』(岩波書店)等を参照。
 - 20) 栗木栄太作の巻頭詩「つくせやつくせ」は、少年個人と国との一直線の繋がりを謳っている(1-11_1895.6_2-p.1045)。その一節は、以下の通り。
「尽くせやつくせ、君のため。尽くせやつくせ、国のため。日本男子(おのこ)の本分を」
 - 21) 2-23_1896.12_8-p.2274、1896年「年末の辞」である。
 - 22) 博文館は、1908(明治40)年、独学する就労者を対象にした『実業少年』を刊行した。

* 本稿は、日本学術振興会2021年度科学研究費補助金(基盤研究C:課題番号17K02262 近代への過渡期の都市住民家族における孝行の諸形態と主体形成)による研究成果の一部である。

(令和3年11月12日受理)